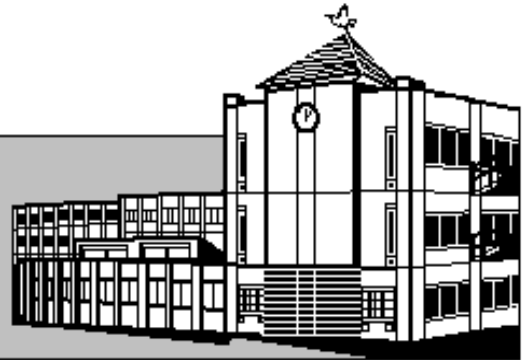


# 図書館だより



2001年度 第2号 (2001年11月)

編集・発行 敬和学園大学図書館

## 目次

「私の僅かな私なりの図書館歴」.....	国際文化学科教授	大海 宏 (1)
「神子と修験の宗教民俗学的研究」.....	国際文化学科教授	神田 より子 (3)
図書館報告.....		(4)
事務室より.....	図書館長	柴沼 晶子 (4)

## 「私の僅かな私なりの図書館歴」

国際文化学科教授 大海 宏

「図書館だより」に一文を書け、と柴沼図書館長からの厳命である。「図書館を利用したことがないんですけど」と逃げたが、「それは却って面白い。反面教師ということもあるし...」と言われて、このような図書館知らずの図書館だよりが活字になってしまった。読まれる方には時間の無駄使い、私は面目が丸潰れ、ということにならねば幸いである。

私の小中学校時代は、どう考えても学校に図書館はなかったのだと思う。中学では「文芸部」に属し、明治から昭和初期にかけての文学はかなり読んだ筈だが、図書館に行った記憶がない。父の蔵書と貸本屋（と本屋の立ち読み）で済ませていたようだ。因みに私の中学時代とは、1944年から48年までである。果たせるかな、調べてみたら、「学校図書館法」が成立したのが1953年で、全国の公立小中学校に図書館が普及するのは60年代半ばである。1948年名古屋の旧制高校に入り高等教育を受けたのだが、大戦末期の空襲で図書館は焼失していた。

初めて図書館なるものに足を踏み入れたのは、1953年名古屋大学（経済学部）へ入ってからである。大学には一応図書館は存在していた。それでもやはり図書館から頻りに本を

借り出して読む習慣は身につかなかった。借り出した本で現在まで鮮明に記憶しているのは、経済学の古典中の古典、アダム・スミスの『国富論』（Adam Smith, *The Wealth of Nations*, 1776）の古色蒼然たるクロス装の原書1冊のみである。動機は、恐らく当代一のスミス研究者である水田洋先生の授業に触発されたからであった。一方塩野谷九十九先生のゼミでは、ケインズの『一般理論』（John M. Keynes, *The General Theory of Employment, Interest and Money*, 1936）の原書を教科書として使ったが、この時は藁半紙に粗雑な印刷・製本の海賊版が入手できたので、図書館のお世話になることはなかった。

しかし、大学の図書館には別の目的でよく出入りした。英文タイプライターを使うためである。図書館の一角に、今日のコンピュータ室と似た感じで、英文タイプライターを数十台備えた部屋があった。複写機など無い時代、洋書を写そうと思ったら、勿論手書きでもよいが、よりスマートでより早い方法は英文タイプであった。何カ月かの内に、タイプの腕も随分上がった。10本の指を使い、ブラインドタッチで、1分間何十語やらを打っていた。（この時の技術が何十年後に、

ワープロや e-mail で再び活用できようとは、まさにお釈迦様でもご存知なかったのでは。)

大学時代、本を読む・借りるという本来の目的でよく利用したのは、実は大学の外にあった別の図書館であった。それは戦後占領下では連合国総司令部に属した「CIE 図書館」で、日米講和条約発効後は米国国務省に移管され「アメリカ文化センター」(ACC) と呼ばれるようになった(現在も「アメリカン・センター・レファレンス資料室」として存続)。洋書の輸入など思いもかけなかった 1950 年代、米国の最新図書・雑誌・資料の揃った所といえば、ここしかなかった。ACC のシャーウィン館長と親しくなった。大学卒業後、1954 年にフルブライト留学生試験に通りプリンストン大学大学院への入学が決まった後に、私の学生時代の不用意な言動から非アメリカ的 = 共産主義者と疑われ、当時米国を席卷していたマッカーシズムの網に引っかかって、ピザの発給が危なくなった。その時にオーガインはそんな人間ではないと米国領事館で証言して私を救ってくれたのが、このシャーウィン館長であった。私の一生で最も劇的・効果的な図書館活用の功德であったろう。無事米国留学に発つことができた。

さて米国である。プリンストン大学の図書館は世界的タイヤメーカーの寄付で出来たゴシック建築のファイアストーン・ライブラリーである。数回は宿題の本を借り出したかもしれない。しかし私の圧倒的な利用は自習室としてであった。図書館は 24 時間開いている。ここで午前 1 時、午前 2 時まで課題図書を読んだり、レポートを書いていると、校庭を隔てた窓の向こうの目抜き通りでは、ボウリング場の看板のネオンが、繰り返しボールを転がし、毎回上手にピンを倒していた。偶々ボウリングは、プリンストン時代、寮の地下室に設備があったので、友人たちと嗜んだ唯一のスポーツであった。

渡米中、大学以外の図書館へ一回だけ足を運んだことがあった。それは有名なニューヨーク市立図書館である。当時プリンストンでは、元外交官で戦後「ソ連封じ込め政策」という冷戦の基本戦略を立案したジョージ・ケナン氏が研究生生活を送っていた。ふとした縁で、短期間、ケナン氏の著作を手伝ったことがある。同氏は、『ロシア、戦線を離脱す』(*Russia Leaves the War*; 1956) という大著(ピューリツァー賞を受賞)にかかっていた。それは第一次大戦末期ロシア革命の時を扱っている。日本は「シベリア出兵」などでかかわっていた。当時の寺内正毅内閣の方針やそれに対する日本の世論などを、ニューヨーク市立図書館へ行って、同時期の日本の資料に基づいて調べてくれることが、ケナン氏から私への依頼であった。プリンストンからニューヨークまでは鉄道で 1

時間程の距離。しかもニューヨークの終着駅の直ぐ近くに図書館はあるので楽だった。建物の大きさ、内部の豪華さに圧倒された。大正期の日本の代表的月刊雑誌を専ら調べた。検索や閲覧がどういシステムになっていたか今となっては全く記憶がない。しかし仕事はスムーズに捗って、役立ちそうな時評といったものを 2、3 見つけることができた。中心になったものは「中央公論」に載った吉野作造の論文であった。どうしても思い出せないのは、それらをどのようにして館内で写したか、である。手で書いて写したに違いない。それ以外に方法はなかった。大学へ帰って、ケナン氏には、その日本文を目で追いながら、同時通訳の如く英語に直して喋った。ケナン氏はそれをその場で機関銃のような速さで英文タイプに打ち込んでいった。

最後に、昨年 2 月、私は漸くにして東京・永田町にある国立国会図書館を生涯初めて「利用」した。私のゼミの 3 年生は、毎年年度の終わり頃、東京で 4 日間恒例の合宿を行う。以前は国際金融の体験学習として、銀行・証券会社・商社・日銀・取引所などが主たる訪問先であった。ところが数年前から金融と政治が重なってきたので、訪問先に永田町(国会)と霞ヶ関(官庁)を加えることとした。昨年第 7 回生の諸君と、国会では衆議院予算委員会を見学し、官庁としては環境庁(現在の環境省)を訪問した。移動の途中で 1 時間余り自由な時間ができた。どこかで一休みしてお茶でもしたい。直ぐ思いついたのが、近くに鎮座するあの国立国会図書館である。皆 20 才以上だし。入り口で手続きをしカードを貰って中 2 階の喫茶室へ直行。皆思い思いの飲み物を安価に頂いて、心身共にリフレッシュし、いい経験ができたという満足感と共に次の訪問先へ向かった。私にとって最初の、そして恐らく最後の、国立国会図書館であった。

【釈明】 私が、大学教員であるにも拘わらず、大学卒業後今日まで図書館とかくも無縁でいられたのは、私の特殊な経歴によるものです。私は大学卒業と同時に入社した大手都銀に定年まで勤めて退職、その後大学に移った者です。銀行勤務の 30 数年間のほとんどを、私は外国為替を市場で売買する現場(ディーリング)で過ごしました。この道での成功は、生まれながらの素質と仕事上の経験・記憶に依存すると言われます。あとは的確な「情報」をいかに 1 秒でも早く入手し、それを一瞬の間に分析・評価できるか、です。他人の書いた本はそれ程有用ではありませんでした。役立つ本が余りにもないので、遂には私自身役立つ本を自分のために書きました(『実践為替レート予測』1983 年、日本経済新聞社)。一時

期ディーラーのバイブル(！?)とも言われました。敬和学園大学図書館にも1冊あります。しかし、今となっては、それも歴史的図書、一寸皮肉な意味ではまさに図書館向き存在になり果てています。数年前絶版になりました。

【告白】 昔の記憶だけで原稿を一旦書いたのですが、歴史や事実関係、例えば「学校図書館法」CIE/ACC図書館、ジョージ・ケナンなどの項目については、いくつかの図書館に通って、確認(必要に応じ微調整)することができました。やはり図書館は役に立ちます



## 日本山岳修験学会賞受賞

国際文化学科教授 神田より子

『神子と修験の宗教民俗学的研究』 岩田書院 2001年2月28日発行 845頁

この本は、1982年から現在に至るまで断片的に調査を行ってきた、岩手県陸中沿岸地方の神子をめぐる修験道と地域社会について、神子を中心に、宗教民俗学的な立場から考察を試みた論文の集大成です。

この研究のきっかけとなったのは、1982年に岩手県宮古市黒森神社の祭礼で、湯立託宣で見た山野目キヌ神子との出会いでした。柳田国男が「巫女考」で書いているように、神社で神子舞を舞っている神子は、形式的なものと、私自身も思いこんでいました。けれども実際に見た陸中沿岸地方で見た神子舞は私の先入観をうち破るものでした。地域の女性たちの神子さんを見る目が違うのです。神子さんが語る託宣を聞く態度が真剣でした。さらに神子さんは、湯立託宣以外にも、本論で言及したのですが、ねまり託宣、オシラ遊ばせ、病気治し、死者儀礼などさまざまな場面で活躍していました。

これら神子の行動は、日本民俗学の成果を遙かに越える広く深いものがありました。日本民俗学で言及されてきた巫女は、民間巫女であり、修行巫女であり、多くは盲目です。さらにシャーマニズム研究の分野で言及されてきたシャーマンとも相容れない場面が多くありました。シャーマンあるいは行者と分類された人たちの多くは、巫病と呼ばれる特殊な病気や、さまざまな不幸を体験し、自身の心身統御による憑依技法の体得を果たし、自己治癒を目的としながら巫業を行っているのです。しかし陸中沿岸地方の神子さんはそれらのどれにも当てはまりませんでした。

神子さんたちは師匠がきちんと決まっています。それらを辿り遡ってゆくと、歴史の分野にも入り込んでしまいました。文書を集め、墓石を探すうちに、過去への探求と、同時代の神子たちとの関わりの双方からのアプローチが欠かせないものとなってきました。その一方で、先行研究のない暗闇状態の中でもがいていました。誰もこの分野の研究に手を付けた人はいなかったのです。他方では、日本民俗学やシャーマニズム研究史の中にこの神子を位置づけたいと願い、四苦八苦する時期が続きました。一時期はそうした先行研究からはずれて、陸中沿岸地域における神子研究は、地域研究であると開き直ったこともありました。

それを越えて視界が開けてきたのは、この地域は近世期には他地域と比べて、ずば抜けて修験者が多くいたことです。修験道と結びついていた神子の歴史を解きほぐす作業が見えてくると、徐々にもつれた糸がほぐれてくる実感が得られました。私自身はそれより以前から、修験道に関わる儀礼や芸能の研究をしていました。だから羽黒山における、羽黒修験本宗正善院荒沢寺での、秋の峰の修行を何度か経験していました。このことは神子が行う儀礼の調査に大きな助けになりました。自分自身の知識としてだけでなく、神子さんが私の修験道の知識に対して、共感を示してくれたのです。羽黒山で島津慈道大先達から教えを受けた九字御身法をはじめとするさまざまな知識は、神子が行う儀礼において「オンノン・タデキリ」と表現する内容などとの一致も少なからずありま

した。陸中沿岸地方では、かつては修験道羽黒派に所属していた神子さんも多くいましたから、彼女たちと私は遠く深くつながっていたとも言えます。

地域の中では多くの方々の協力を得ることができました。文書探し、墓石探し、修験の家、神子の家を探し回りました。そして話を聞き、文書を見せて貰い、墓も位牌も過去帳も見せて頂きました。最も迷惑をかけたのは他ならぬ本書の主役の神子さんたちです。祭りや儀礼の場だけではなく、彼女たちの自宅へ何度も押し掛け、繰り返し繰り返し話を聞きました。彼女たちの信仰の世界へ、そして心の中にまで土足でいったようなものでした。神子さんに信頼を寄せる地域の女性たちも、儀礼の場に侵入するよそ者の私を、迷惑と知りつつ暖かく迎えてくれました。彼女たちと日常を共にすることで、地域の人たちのカミや靈魂についての考え方をどれだけ教えられ、理解の助けとなったか、計り知れないものがあります。

途中何度もそして様々な紆余曲折がありました。調査地への関心を継続して持ち、どうにか研究を続けることができ

ました。その結果、本書の完成によって私の長年の仕事も一段落しました。しかしこれは一段落であって終了ではありません。今後この地域がどのように変化してゆくのか、どういう形で、そしてどういう人々が神子さんの跡を継いでゆくの、じっくり見守ってゆきたいと考えています。

この本は慶應義塾大学社会学研究科委員会より平成11年(1999)6月9日に学位(社会学博士)を受けた博士論文を基に作成したもので、今回の刊行に当たり、大幅な加筆と修正を加えました。

なお本書の刊行にあたり、直接出版費の一部として、平成12年度科学研究費補助金「研究成果促進費」(学術図書)の交付を受けました。また敬和学園大学学術図書出版助成費の交付を受けました。

北垣宗治先生を始め、大学の諸先生や事務の方々のお力添えでここまで仕事をやり遂げることができました。どうもありがとうございました。

## 図書館報告

### 寄贈図書 (田原嗣郎先生より)

水本邦彦『近世の村社会と国家』  
藤田省三『天皇制国家の支配原理』  
遠山茂樹『自由民権と現代』  
船津功『歴史学と民衆史運動』  
茂田井教亨『日蓮の行法観』  
梅原猛『水底の歌上・下』  
会田雄次『日本人の意識構造』  
石母田正『歴史と民族の発見』  
井上清『日本の軍国主義』  
松本滋『人間の元なるもの』  
義江彰夫『鎌倉幕府地頭職成立史の研究』  
神川正彦『歴史における言葉と論理』  
出口京太郎『巨人出口王仁三郎』  
世良晃志朗『封建制成立史序説』  
櫻井庄太郎『日本封建社会意識論』  
松本三之助『國學政治思想の研究』  
開國百年記念文化事業會編『鎖國時代日本人の海外知識』  
永井秀夫編『北海道民権資料集』  
芝原拓自『明治維新の権力基盤』  
家永三郎『現代史学批判』  
向坂逸郎編著『嵐のなかの百年』  
岩間一雄『渋染一揆・美作血税一揆の周辺』  
沖田行司『ハワイ日系移民の教育史』

清原貞雄『國史と日本精神の顯現』

笠谷和比古『土の思想』

遠藤元男『近世職人史話』

尾形仍他編『近世の文学上・下』

### 蔵書数 (2001年10月31日現在)

区分	和書	洋書	合計
図書資料	36,378	12,847	49,225
逐次刊行物(種)	98	85	183
視聴覚資料	240	202	442

## 事務室より

図書館長 柴沼晶子

構内の木々も紅葉し、図書館窓側のたわわに実った花梨の香りが冬の訪れを告げています。今回の「図書館だより」には大海教授にユニークなエッセイをお載せいただきました。また、神田教授の専門的なご労作をご紹介できることは敬和学園大学図書館にとって大いなる喜びです。徐々に寄贈図書の整理が進んで参りました。その一部を感謝をもって掲載させていただきます。

読書の秋、学生のみなさんから最近本のリクエストが送られてきています。どしどしお寄せください。

今号からゼミの先生を通して「図書館だより」を全学的に配布したいと思います。ご協力をお願いいたします。